



わたしが、今日まで劇作家を
継続できたのは、仲間や劇団が
あったからだといえる。最低、
年に1本は新作を書かなければ
いけない。仲間も劇団も若い人、
それも若い男の俳優が中心にな
っていたから、おのずから内容

もそれに伴う内容となる。

「倭人伝」は松浦の漁師の若
者と炭鉱の若者との、一人の娘
を巡っての抗争であるとはす
で書いた。とても評判がよく、
評判を聞き付けた演劇評論家や
観客で六本木の俳優座劇場は満

高校2年の時であったはずであ
る。空からニューヨークを撮つ
たファーストシーンから圧倒さ
れた。歌も踊りもストリーも
新鮮であった。あれは「ロミオ
とジュリエット」が下敷きにさ
れていると知らされて納得し

を振る舞ったり、文学や蝶々
を語ったりする。
蝶を採集しに南方へ渡るお坊
さん。一兵の好きな読書好きの
女子高生。その女子高生が好き
になる一橋大学の一兵の先輩。
関西へ行くという愚連隊は一兵

舞台上で若者を描く

席であった。ある演劇評論家は

た。

にパーティー券を売り付ける。

「これは日本版のウエストサイ
ド物語である」と指摘した。

後年、この高校時代の話は「風
の墓」という舞台で書いた。「わ
どがあり、一兵の母が、お父さ
んが課長に昇進したと駆けつけ

この2人の日本刀による決闘な
どがあり、一兵の母が、お父さ
んが課長に昇進したと駆けつけ

ここにこと笑いながら「それぞれ
がそれぞれの人生で主役」とい
う。お遍路さんの人生には、そ
んなものはなかった。「夢であ
いましょう」が流れる。

指摘されて「なるほど、鋭い
評論家もいるものだ」と感じ入
った。

ある。昭和37年の夏、肥前松浦
に年老いたお遍路さんが現れ

る。その一兵の母にお遍路さん
は三好達治の詩を口ずさむ。「た

また「風の墓」をやらなけれ
ばいけないと決めている。

わたしが「ウエストサイド物
語」を見たのは佐賀県立伊万里

お遍路さんに母の手作りの弁当

駆け抜けて、ひらりひらりと海